

## 高血圧治療の遅れが脳卒中リスクを上昇させる

2014年に、米国においてガイドラインが改定され、糖尿病や慢性腎臓病のない60歳以上の患者に降圧薬の処方を開始するための収縮期血圧の基準値が140mmHgから150mmHgに変更された。この改定は議論を巻き起こしている。そこで本研究では、収縮期血圧と脳卒中の発症率について検討した。

北マンハッタン研究に参加した、脳卒中や糖尿病、慢性腎臓病のない60歳以上の対象者1,750例を追跡し、脳卒中の発症率について調べた。試験開始時の平均年齢は72歳、女性63%、ヒスパニック48%、白人25%、黒人25%であった。対象者の40%が降圧薬を服用しており、収縮期血圧140mmHg未満が43%、140~149mmHgが20%、150mmHg以上は37%であった。中央値13年の追跡期間中に、182例が脳卒中を発症した。人種や年齢などの人口動態、血管リスク、拡張期血圧、服薬について補正したところ、収縮期血圧140~149mmHgの者では140mmHgの者と比べて脳卒中リスクが上昇した（ハザード比1.7）。ヒスパニック系と黒人は特にリスクが高かった。

したがって、糖尿病や慢性腎臓病のない高齢者に対し、降圧治療を開始する基準となる収縮期血圧値を140mmHgから150mmHgに引き上げることは、脳卒中リスクを上昇させることが示された。

出典：Hypertension. 2016; 67(3): 520-526